

記録映画

『フレীবルの生涯と思想』を製作して

茂木 正年

一九八二年四月二十一日はフレীবルが生まれて二〇〇年にあたる。これを記念して東ドイツ（ドイツ民主主義共和国）では、盛大な記念祭が催された。また、これを機会に東ドイツパノラマ通信社では、フレীবルの生涯と思想を紹介する映画を製作することになり、パノラマのハイエル社長から私に、撮影協力の依頼と招待状が届けられた。数年前から、私が幼児を対象に記録映画の

世界を製作し、その上映運動を続けてきた関係もあったのだが、私が以前に提案した企画に応えてくれたのである。

招待状を手にした私は、たいへんうれしかった。しかし、それと同時に、それではどのような形でこの映画をまとめようか悩んだのである。だが、思案の結果は、迷わず広島大学名誉教授の荘司雅子博士をお訪ねして、先

生のお力に頼るのがいちばんと考えたのである。私は、広島へ飛んだ。一昨年 of 十二月初旬のことである。

事の次第を聞かれた荘司博士は、これはすばらしいクリスマスプレゼントだ、協力しましょう、のお言葉だった。私は、安堵の胸をなでおろした。そして、その旨をすぐさま東ドイツへ電報で伝えた。折返しパノラマからの返信は、荘司博士がご協力くださることはとてもすばらしい条件だ、心から歓迎し、この企画の成功を祈りたいということであった。クリスマスを前に、東ドイツへの取材計画が急展開をしたのである。

*

私たち取材班が、パンナム〇〇一便で東ドイツへ向ったのは、昨年四月十七日の夕方であった。一行は六名で、荘司博士をはじめとして広島大学学校教育学部 of 藤井敏彦教授（藤井先生もパノラマからの招待で）それに我々撮影班の四名であった。私物も含めて約五十個にのぼる膨大な機材を持つての旅である。無事に通関できるかどうか、いつもながら海外取材は、心配の種は尽きない。まして今回は共産圏への旅である。

ジェット機は、ぐんぐん高度を上げていった。

パノラマ通信社が、西ベルリンから入る我々のために指定した出迎えの場所は、チェックポイント・チャーリーであった。しかし、ほつんとそういつてきただけで我々には、そこがどんな場所であるのかさっぱりわからない。ただ大使館で貰った地図に、その場所を印して持っているだけである、心配ではあるが、まことに興味もあった。

しかし、こうして、あれこれ思いをめぐらしていると、我々が乗ったDC9が、右へ大きく旋回した。窓を覗いたら、もうそこはベルリンであった。小さな湖が、無数に点在する美しい水の都である。ジェット機は、機首をどんどん下げて滑るように西ベルリンのティーゲル空港に着陸した。

ドイツの空気は、気持がよかった。爽やかで澄んでいった。樹木は、今、一番に芽ぶいて、やわらかな葉が風にふるえていた。あの有名なドイツの森が、長い冬からめざめて、動きはじめた季節なのである。

空港税関を無事に出ると、あらかじめ機内でチャーターしておいた車が、それも大型のバスが待っていた。量が多いのは人ではなくて、荷物だったのだが、我々を待

つていたのは、八十人乗りのバスだった。しかし約束の時間をとうに過ぎていたので我々は、そのバスの隅の方にちょこんとおさまって国境へ急いだ。

チェックポイント・チャーリーは、あのブランデンブルグ門のそばにあった。案の定ここでは、すべてのものが遮られていた。いわゆる壁である。有刺鉄線は、幾重にもめぐらされて、異様な雰囲気がただよう寒々とした場所であった。見ると、ここを警備する西側三国の兵士は、各々の国の軍服で身をかため、皆銃を構えて警らしている。そして通行路以外のいたるところは、地雷が埋められているのである。また、遙か向こうの東側をみると、向うは向うで、見え隠れする数人の兵士が、やはり銃を片手にこちらを窺うというありさまである。そして、東西の国境守備隊が睨みあう中立地帯は、約三百米ほどの距離であって、そこは荒れ果てて、どちらの国からも力が及ばない。人が住んでいたのに人が入ることができなくなってしまうところが、こんなにみじめで荒廃していくものなのか、恐しいばかりである。赤白に塗られた国境の遮断機だけが、妙に鮮やかで不気味であった。

この国境に、我々の荷物はすでにバスから降ろされて山のように積まれていた。チャーターしたバスは、これ以上は無理ですと、さっさと帰ってしまったからである。さあ、これからどうやってここを通ればよいのだろう。向う側に出迎えている筈の車も、ここからは見えな。深刻である。

いつまでも困った困ったでは埒があかないので、とに角、私は、カメラマンの高岩と、中間地帯を通って東側の検門所へ向った。荘司博士も心配顔である。検門所では、当然のことながら厳しいチェックを受けた。しかし、我々は、パノラマの招待ということもあって、きわめて友好的で、荘司博士をはじめ我々の名前もVIPとしてすでにリストアップされていて歓迎の意を表してくれた。迎える車も三名で、一台は荘司博士の専用車、あと二台は、我々のために用意されていた。五十個もの機材もお構いなしである。しかし、機材の輸送だけは名案がなかった。用意された車も、中間地帯には入れないという。まったく情けないことであった。ふと見上げると、空はどこまでも碧く、白い雲が二つ三つのんびりと浮かんでいた。私は、腹を決めた。時間がかかっても赤

帽の合宿よろしく担いで運ぼうと思った。その時である。どこで見つけてきたのか分らないのだが、高岩が、今にもこわれそうなリヤカーを一台持ってきたのである。まさに渡りに舟とはこのことである。リヤカーは、年代もので空気の半分抜けたあわれなものであったが、贅沢などいっている場合ではない。これでいくことにした。見栄も、外聞も捨てて、東西の警備隊が見守る中を莊司先生以下全員で、リヤカーを押した。珍奇な機材輸送作戦が開始されたのである。みんな必死だった。はじめは、この騒動に乗じて何か起つてはと身構えていた東西の兵士たちも、あまりに風変りな風景に拍子抜けの感じで、一瞬、和やかな笑いがこぼれた。暫し、東西両ドイツの緊張緩和である。しかし、この事件で、日本人は、なんと場当り的なことをやってのけるものだと嘲笑されたのではと冷汗も出たが、この道化が、ひとときでも、ここで睨みあう兵士の心に、何かの橋渡しでもできればとは、それを演じたものの空いばりであるうか。それにしても、この人と人との行き来を、これほどまでに拒絶したこの壁の悲劇は、悲しいものである。

いつの間にか、あの澄んだ青い空が、美しい夕映に染

まっていた。

これが、我々取材班の第一日目であった。

*

四月二十一日は、フレールベルの生まれたオーバーワイスバッハへ記念祭の取材で行った。フレールベルの生家は、すっかり改修されて、二階は博物館になった。又、家の前には、新しくフレールベルのブロンズ像が建てられた。

フレールベル幼稚園も新築されて、可愛い子どもたちが、歓迎してくれた。

フレールベルの生家で、我々が撮影の準備をしていたら、一人の老人が訪ねてきてくれた。シュローテさんである。ここに生まれ、ここに住んでその半生をフレールベル研究に捧げた方である。郷土歴史家とでもいうのだろうか、土地の人たちは、この人のことを「フレールベルおじさん」と呼んで親しんでいたが、道ですれちがう子どもたちは、やあ、フレールベルとそのものズバリで呼んでいた、子どもたちの人気者なのである。莊司博士とも以前に面識があったそうだが、彼は、今回の我々の目的を知るととても喜んでくれた。そして、長い間の研究でわかったことは、なんでも話してくれるというのである。

彼は、地元のフレイベル友の会の会員でもあるのだが、自分の足で訪ね歩いて書いたフレイベルの遺跡についての著述は、権威があり、見事であった。今回の我々の取材が、こんなにまで広範囲にわたり、そして正確にできたのもこの人の指導によるところが多い。彼から授けた貴重な資料の中には、大発見が、数々あった。中でも、フレイベルが、キンダーガルテンの名前を思いついた場所を教えてください、案内して貰えたのはほんとうに幸わせだった。そこは、フレイベルブリックと称して、現在第二恩物を型どった記念碑が建っていた。又、シュタットハイムの町には、フレイベルがその生涯の中で最も幸福で安定した四年間を過ごしたホフマン伯父さんの家が、今も残っていることも教えてもらった。その他フレイベルがバート・ブランケンブルクにウィルヘルミネ夫人と移り住んで、はじめて教育遊具を製作したシュヴァツア川のほとりの水車小屋なども残っていることがわかったのである。日本では分らなかった事実が、次々とてきた。

ウィルヘルミネといえば、面白い話がシュローテさんの口から飛び出してきた。

それは、この名前は、夫人のほんとうの名前ではなかったというのである。ウィルヘルミネとは、実際はフレイベルの幼な友だちの名前で、フレイベルがとても愛していた初恋の少女の名だったのである。そしてフレイベルは、どうしても彼女と結婚したいと思っていたのだが、彼女は、他の人と結婚してしまった。しかし、フレイベルは、いつまでもその人が忘れられず、夫人と結婚するときに、夫人に請うて夫人の呼名をその名前に変えてもらったそうだ。よほど心に残った女性なのだろう。しかし、それにしてもフレイベルのその願いを聞きとどけてくれたウィルヘルミネが、心にしみる話だった。

シュローテさんは好々爺だった。撮影が終って町へ出たら、あちらからも、こちらからも声がかかった。みんな子どもたちである。彼も、片手をあげてうれしそうに答えた。私は、この七十を越えた老人の柔和なまなざしの中に、ちらりと、ありし日のフレイベルを感じとったのは、私の気のせいであろうか。

生家の裏庭には、早春のやさしい陽ざしがいっぱいである。あたり一面に可憐な草花がうれしそうに咲き乱れていた。ふと気がつくくと一匹のリスが垣根ぞいに逃げて

いくのが見えた。

何もかも、昔のままのような気がしてならなかった。

*

四日間に亙った記念祭も終って、いよいよ我々の撮影も本番である。

最初に訪ねたのは、シュワイナにあるフレーベルの墓である。我々は、そこから撮影を始めたのである。そして、その後、イエナ、シュタットイルム、ブランケンブルク、カイルハウなど八ヶ所のフレーベルゆかりの地で、庄司博士の講義をフィルムに収録した。とりわけフレーベルブリックの撮影は、まばゆいばかりの光の中で、たいへん熱がこもった、庄司博士も頬を紅潮させての名講義であった。このスタイゲル山頂からみえるリンラの谷あいの風景は、庄司博士が長い間、それは、どんなところなのだろうかと思いを馳せていたところである。今、先生はその場所に立っておられるのである。五十数年に及ぶフレーベル研究の長い道程を思い返されているのであろうか、萬感、胸に迫るご様子が、よくよく感じとれた。ゴオーという音とともに、下の谷あいから風が吹きあがってくる。博士の山吹色のスカーフが、その風に揺

れる、風はなかなか止まらない、松林を走り抜け、木々の梢をうならせて、ときどき庄司先生のお話をも遮ろうとする。しかし、フレーベルが、何故、幼稚園をはじめたのか、“キンダーガルテンの名には、どんな思想がこめられていたのだろうか”ここでの講義は、この強い風の中でも、ひるむことなく続けられた。この映画の圧巻である。我々が日本にいちばん持ち帰りたい映像なのであった。それにしても、この日の庄司博士はお幸せそうであった。一生をかけて学問をするということはなんとすばらしいことであろう。

常に思うことであるが、映画とは、ほんとうにたくさんの人々の叡知と尽力がなければできないものである。今回の映画も、パノラマ通信社を窓口に、DDRの絶大な支援がなければ、到底不可能であった。スタッフも、大勢動員された。パノラマの副社長をキャップに、本社に二人、現場に通訳を含め四名が、配置されたのである。パノラマが、負担した製作費も巨費であった。パノラマはじまって以来の協力製作費が投じられたのである。撮影現場でも、いつも、その最高責任者が出迎えてくれた。そして、庄司博士と我々の取材のためには、

可能な限り便宜をはらうようにという指令が、いろいろな組織や団体に出されていたのである。

ベルリンの教育科学アカデミーへ行つたときもそうであった。フレールベルの真筆原稿を撮影させてくれるというので訪問したのだが、手厚い出迎えのあと、一冊にフイルされたリストを渡された。そして、ご希望のものは、なんでも御用意致します。すべて撮影許可がおりております。ということだった。私は、びっくりした。せめて『人間教育』の一頁だけでも思っていたからである。莊司博士も、これは異例のことよを連発された。私は、それならばと、「母の歌」も「一八三六年の論文」も「リナ」もと矢つぎばやである。莊司、藤井両先生は、ご研究の資料のためにと、リストの頁をめくった。やがで、次々とフレールベルの真筆原稿が、カメラの前に出された。独特な筆跡で、丹精こめて書かれたものである。感激であった。これが、あの血の出るような苦しみの中で、と思うとそれ持つ私の手は、ふるえた。そして、こんなすばらしい撮影条件をつくってくれた関係者に、私は、感謝し心の中で手を合わせた。

あとで分つたことであるが、われわれの今回の取材に

関しては、はじめから、陰で心くばりをしてくださった方々がおられたのである。ベルリンのフンボルト大学の学長、クライン博士と、教育科学アカデミーの副総裁ギュンター博士（フレールベル生誕二〇〇年祭委員長）である。お二人とも、現在、東ドイツ教育界の最高の地位で活躍だが、莊司博士とは、十数年来の親しいお友だちだったのである。お二人は、今度の映画が、莊司博士の指導で製作されることを心から喜ばれ、その準備や条件づくりのために精力的に動かれたのである。

今回も、クライン博士は、莊司博士にお会いしたくて、わざわざ研究先のアフリカから日程を早めて帰国されたほどだし、ギュンター博士は、莊司博士が、東ドイツに滞在中、付ききりでお世話をされていた。

今度の映画製作も、こうした方々や関係者の熱い関係が背景にあったのである。

すべての予定を無事に終えて、莊司・藤井両教授が帰国の途につかれた後、私たちは、ヴァイダにあるフレールベル保母養成所と、ハレ市にあるヘレン・ランゲ保母養成所を相次いで訪問、取材した。フレールベルの伝統を継いだ保母養成所を是非取材したいという私の希望に応じ

てくれたのである。

ランゲ保母養成所は、東ドイツの保母養成所の中心的な役割をしているところで、教師たちの再教育や、通信教育などのステーションにもなっているところである。

また、フレーベル保母養成所は、特にフレーベルの教育思想や、実践を、カリキュラムに組んで保母を養成しているところで、校長であるクネヒテル博士は、フレーベルの研究者で、かつてフレーベルが、幼児教育の啓蒙のために発行した日曜新聞の研究で博士号をとられた方である。インタビュウの中で女史は、今日、東ドイツが、フレーベル生誕二〇〇年祭を催す意味や、社会主義国家の建国の理想とフレーベルとの関係などを我々に位置づけてくれた。つまり、フレーベルは、二〇〇年前に教育を中心に考えて、世の変革をやるうとした。人間のための幸福な社会をつくる理想のためには、そして、不満に思った社会や、矛盾だらけの社会を変えていくには、教育を中心にして、教育によってよりよい社会をつくる以外にはないと考えた、というのである。また、フレーベルは、教育者は、教える中味と、教育者自身が実際にやっていることとは一致しなければならぬと主張し、教

々の圧力にも屈しないで、その理論と実践を展開した。これはとても大変なことで、特に尊敬すべきことだ、と力説するのである。女史のお話はまだ続いた。フレーベルによれば、教育とは、家族だけの課題ではなく、国民全体の課題でなくてはならない。だから東ドイツは、社会主義の理想を達成するために教育を最も重視して、国民全体で努力している。真の教育によって人間の幸福のために新しい国づくりをしているのだ。フレーベルが考えた理想の社会に於ける人間の役割は、現在でも我が国の人間に対する考え方として位置づけ尊重しているというのであった。クネヒテル校長は、よく通る声で情熱的に演説したのである。

東ドイツは、建国以来三十数年経った。そして今、国民は一丸となって、子どもたちの将来のために生産し、労働している。教育環境も、福祉も着実に前進してきた。働く母親は、手厚く保護され、母親を大切に守るための様々な法律も整備された。それも、そのことが子どもたちの幸福につながると考えるからである。フレーベルが残した遺産は、今、この国で受け継がれているのである。

(日本記録映画研究所)